

## ある反体制派活動家の交通事故死

さる7月22日午後1時50分、キューバ東部のグランマ県のバヤモ市のラ・ガビーナで、交通事故により、反体制派のグループの一つ、キリスト教解放運動のリーダー、オスバルド・パヤー・サルディーニャス（60歳）とハロルド・セペーロ・エスカランテ（31歳）の2名が死亡、運転していたスペイン人のアンヘル・カロメーロ・バリオス（27歳）と同乗者のスウェーデン人のジェンス・アロン・モディグ（27歳）は、軽傷を負い、バヤモの病院に搬送され、治療を受けました。

オスバルド・パヤー(1954年ハバナ市生まれ)は、1988年キューバ国内でキリスト教解放運動(MCL)を設立し、反体制活動家として活動を始めました。パヤーは、1998年には、憲法改正を求める国民投票を求める「バレロ計画」を提唱し、2000年1万人余の署名を集めましたが、憲法の規定により国会で承認されず、バレロ計画は成功しませんでした。パヤーは、米国の経済封鎖に反対する一方、ヨーロッパ諸国から支援を受け、2002年にヨーロッパ議会から、人権及び思想の自由に関するサハロフ賞を受賞しました。

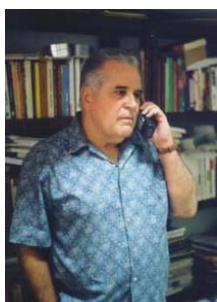


事件の翌日の23日、キューバ共産党中央機関紙の「グランマ紙」は、異例とも思われる速さとスペースで、「残念な交通事故でパヤーが死亡した」ことを報道しました。パヤーが国際的にも知られた反体制派活動家であり、また同乗者がキリスト教解放運動(MCL)を支援する外国人であることから、この事故が、政府の謀略によるものだという批判が内外で持ち出されることを予想してのことだと思われます。

早速、事件同日、パヤーの娘、ロサ・マリアが、「父は、当局によって殺害された。交通事故ではなく、別な車がパヤーの車の走行を妨げ、道を外れ、木に衝突したものと」声明を出しまし



た。しかし、やはり反体制派 ロサ・マリアとオフエリア・アセベドで国際的にも著名な「キューバ人権・国民和解委員会(CCDHRN)」のエリサルド・サンチェス委員長は、「バヤモ在住の委員会のメンバー二人を即時現場に派遣し、事件の聞き取り調査を行ったところ、別な車による走行妨害はなく、速度の出し過ぎによる交通事故だ。いかなる謀略事故という見解にも反対する」と、翌日の23日に外国通信社に語りました。



エリサルド・サンチェス

事故を起こした乗用車ヒュンダイ・アクセントを運転していたのは、スペイン人のアンヘ

ル・カロメーロで、スペイン国民党(PP、右派政党)の青年部、新世代の副書記長で、前部座席の右には、スウェーデン人のジェンス・アロン・モディグ、スウェーデン・キリスト教民主党青年部(KDU)指導者、後部座席の左側にパヤー、右側にMCLのメンバー、ハロルド・セペーロが同乗していました。車の左側は大破し、パヤーは即死し、セペーロは、病院で死亡しました。



アンヘル・カロメーロ

事故の原因は、キューバ内務省の発表によると、「4人は22日早朝6時にサンチャゴ・デ・クーバを訪問するためハバナを出発し、740キロメートル走行した、午後1時50分頃、工事中の高速道路の悪路を避けるため急ブレーキをかけたところ、バランスを失い道路の右側の盛り土に乗り上げ、樹木に衝突して大破した」というものです。道路は、道幅17メートルあり、かなり幅広いもので、普通の状態では、道路を外れることは考えられません。距離と時間を計算すると、平均時速120キロ以上で8時間近く走行したことになり、かなり無謀な運転だったことがわかります。



ジェンス・アロン・モディグ

しかも、事故直前の80メートルからも、工事中の区間の制限速度時速60キロを遥かに超える猛スピードで運転していたことが想像されます。目撃者の証言もそれを裏付けています。カロメーロは、工事中の注意標識には気が付かず、舗装されていない箇所にはさしかかり、悪路を避けるために、急ブレーキをかけ、ハンドルを切ったところ、車はバランスを失ったと述べています。



他の車が、事故車の走行を妨害したかどうかについては、生き証人としての証言は、運転していたカロメーロ、同乗者のモディグの2名となりますが、31日に内外の記者団に発表されたビデオでは、カロメーロは、後続車は見られなかったと証言し、モディグは、記者会見で事故の瞬間は眠っていて覚えていないが、後続車が妨害をしていたという記憶はないと明言しています。また、キューバ側が発表した3人の目撃者の情報も、事故車の猛スピードを確認しています。事故の現場の状況、当事者の証言、目撃者の証言からも、事故が、運転手の疲労による不注意と制限速度を遥かに超える猛スピードにあったことは、否定できません。

すべての犯罪に動機があるとすれば、キューバ政府側には、今、MCLの指導者、パヤーを肉体的に抹殺しなければならない理由は見出せません。近年、ラウル政権とハイメ・オルテガ枢機卿が率いるキューバのカトリック教会の間には対話が進み、関係が改善されていることから、パヤーは、それを批判し、彼が指導するMCLの影響力も低下してきてい

ました。この数年間、活発に反政府活動を展開してきたのは、「白い貴婦人たち」グループや、キューバ民主同盟

(ALDEC)のギジェルモ・ファリーニャス（2010年EU議会よりサハロフ賞受賞）など抗議のハンストを行うグループです。その他、反体制グループとして、革新的かけはし党(PARP、代表マヌエル・



キューバ政府発表の事件説明図

クレスタ・モルア、社会民主主義を標榜)、住民社会通信ネット（代表マルタ・ベアトリス・ロケ）、キューバ民主自由党（PLDC、代表エクトル・マセダ）、キューバ社会民主党（PSC、代表ブラディミーロ・ロカ）、ラウトン人権協会（FL、代表オスカル・エリアス、ビセ）、キューバ共和党（PRC、代表ブラディミール・カルデロン）などがありますが、いずれも合法的な政党や組織ではなく、勢力は数十人止まりです。

しかし、反体制派の人びと、彼らを支援する国外の勢力は、問題を政治問題化しようと目論み、この事故調査結果に満足していません。国内のオフエリア・アセバド、パヤー未亡人、「白い貴婦人たち」グループ、ファリーニャス、ブロガーのヨアニ・サンチェスなどは、こぞって謀略説を主張し、米国国務省は「透明な調査」を、米国上院は第三者による事故調査を要求しています。

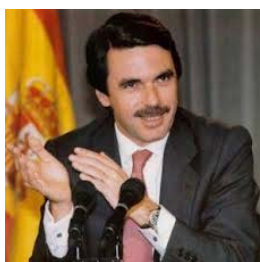
この背景には、この事件には、交通事故によるパヤー達2名の死亡という問題と、外国人2名の事故に関連する行動が、入国目的に違反しているという政治的問題の二つの問題があるからです。反体制派とそれを支持する国外の勢力は、単なる交通事故に対して証拠を示さずに、執ように疑問を提起し、「より透明な調査」、「(政府から独立した第三者による)調査」を要求し、キューバ政府が、反体制派を不当に差別し、抑圧している印象を引き出そうとしているようです。

ところが、事件の調査の過程で、パヤー達のMCLがどのように海外の反キューバ組織と関連しているかが分かってきました。カロメーロとモディグがキューバに入国したのは、事件の3日前の6月19日のことでした。二人は、観光目的で観光ビザによって入国しました。観光ビザで入国した場合、日本や、米国、EUの国々でも、どんな国でも観光以外の活動、いわんや政治活動をしてはならないことになっています。

スペイン国民党新世代の副書記長、カロメーロは、反キューバ政策の急先鋒であるホセ・アスナール元首相とマドリード・コムニダド委員長エスペランサ・アギーレの側近でも

あり、ラテンアメリカ諸国の革新政権に反対する勢力を支援する「社会問題分析・研究機関」(FAES、アスナールが会長)の活動家でもあります。

一方、右翼政党のスウェーデン・キリスト教民主党青年部(KDU)指導者のモディグは、強硬な反キューバ組織の国際共和主義協会(IRI)と密接な関係をもっています。二人にキューバへの入国を指示したのは、スウェーデン・キリスト教民主党(KD)の国際関係部長のアニッカ・リゴであることが分かっています。目的は、モディグの証言によれば、MCLに資金4000ユーロ(実際はもっと多かったかもしれません)を提供すること、パヤーの娘とともにキューバでMCLの青年部を立ち上げること、パヤーと一緒にキューバ各地を回り、



ホセ・アスナール

MCLを再活性化することでした。サンティアゴ訪問は、MCLなどの反体制派諸グループに資金を渡すことだったのです。モディグは、そのため、訪玖まえに米国のジョージアにわたり、IRI及び全国民主主義協会(NDI、米国の反共組織)の代表と会っています。IRI、NDIとも米国開発庁(USAID)の下部機関です。USAIDは、国務省参加の機関で、海外の革新政府に反対する勢力に資金援助を与えていることで知られています。2009年から2012年の間、USAIDは、キューバ対策費として7500万ドル(約90億円)受け取っています。

また、カロメーロは、PPの地域執行委員会委員長でアスナールの元補佐官、パブロ・カサード・ブランコから、スウェーデン在住のスペイン人でKD党员のカエターナ・ムリエルと接触するように指示を受け、ムリエルから、パヤー宛ての資金とキューバでの連絡先を登録した携帯電話を受け取りました。その後、カロメーロは、フェイスブックを通じて、モディグと連絡を取り、二人は、マドリッドで会います。ブランコは、CIAのエージェントである、反キューバの亡命キューバ人カルロス・アルベルト・モンタネールとも深い関係にある、前述の『キューバの春』の編集長、アギーレと親密な関係にあります。ブランコは、2008年には、「秘密裏に」訪玖し、パヤーと会っています。

モディグは、31日の記者会見で、「キューバに観光ビザで入国し、反体制派への支援資金・物資を渡すことが、違法であるかを知っていたか」と質問され、「違法だと理解している。お詫びする」と弁明していますが、彼は、すでに2009年に同じような目的で、KDの指導者であり、反キューバの雑誌『キューバの春』の編集長、ビクトル・オルメド・カプデポンから同じような指示を受け、キューバを訪問し、パヤーに資金と資材を渡したことを認めています。モディグも、カロメーロも、今回の行動が違法行為であることの確信犯なのです。

こうして見ると、交通事故は謀略事件ではなく、事件は、米国の米国開発庁(USAID)、その傘下のIRI、NDI、スウェーデン・キリスト教民主党(KD)、スペイン国民党(PP)、その

外郭団体のFAESが仕組んだ、MCLを始めとするキューバ反体制派の支援、MCLの活動のテコ入れを進める計画を実行する過程で起きた不幸な交通事故だったことがわかります。パヤーとセペーロは、大きな国際的謀略事件の犠牲者となった側面もあります。

カロメーロは、キューバの交通法規に基づき、2名の過失致死容疑で裁判に付される見通しで、モディグは、キューバでの反体制派の支持活動という自らの行為を31日の記者会見で謝罪し、スウェーデンに帰国後も、反省は変わらないと述べた後、31日帰国の途に着きました。本来なら、モディグは違法行為の罪をキューバで問われるものですが、スウェーデン政府との関係を悪化させたくない、ラウル政権の慎重な姿勢が伺えます。

(2012年8月2日 新藤通弘)